

アルレグロ エネルヂーコ

アルレグロ モデラート

レント アツサイ

モルト ギワーチエ

〔音楽〕第十卷第十一号 大正八年十月 三五〜三六頁

(四) グスタフ・クローン Gustav Kron

在職期間 大正二年〜十年(一九一三〜一九二二)、大正十一年〜十四年(一九二二〜一九二五)

外国人教師

担当科目 絃楽、声楽、和声学、作曲、合唱、管絃楽

履歴(要約)

一八七四年八月二九日ドイツのブラウンシュヴァイクに生まれる。

一八八九年〜一八九二年ヴァイマルに移り、ヴァイオリンをハリツクス、ピアノと音楽理論を宮中顧問官ミユラー・ハルトウングに師事する。

一八九二年ドレスデンの王立音楽院入学、カポルティ、ドレーゼケに師事する。

一八九六年〜一八九八年ハンブルクの学友協会にてソリスト、カペルマイスター。

一九〇〇年ベルリン・フィルハーモニー管絃楽団のソリストとなり、指揮者A・ニキシュのヨーロッパ演奏旅行に同行する。

一九〇四年R・シュトラウスのヨーロッパ演奏旅行に同行する。

一九一三年(大正二年)、A・ニキシュ、K・パンツェル、K・ギルテの推薦により、ユンケルの後任として東京音楽学校の外国人教師に就任。在

任中多くのベートーヴェン作品を本邦初演した(本百年史『演奏会篇第一卷』参照)。

昨日の上野樂堂

昨日午後二時から音楽學校學友會の第四回土曜演奏會があつた、會員の合唱に始まつて一部二部で九番の曲が進むうち長坂好子の高音獨唱で春の抒情調の餘裕ある唄ひぶりや、谷村なつ子のピアノ獨奏にバラツドの曲面白く、蜂谷龍子のヴァイオリンは非常な上達を示してゐたが慾にはもう一段冼えた音色を聞きたかつた併し當日の場に溢れた聴衆が待ち構へた聴き物は新任教師クローン、シヨルツ兩氏の初演奏であつた、拍手に向へられて登壇した兩氏はいづれも思つたよりは地味な音楽家であつた、曲はベートベンのソナタでこれまで本邦にては演奏されたことなき大物クローン氏の澄み切つたヴァイオリンとシヨルツ氏の天才的のピアノと相待つて軽い春の空氣の好ましいその中には息のつまるやうな恐しみを覚えさせるベートベンの藝術は遺憾なくその一面を傳へられた(け)

〔都新聞〕大正二年二月九日

ベートーヴェン第九交響曲の初演について

クローン氏の指揮で想ひ出すのは、なんと云つてもベートーヴェンの第九交響曲初演である。あの時は音楽學校の職員諸氏もクローン氏も本當に熱誠を籠めて事に當つたらしい。恐らく、當時の上野管絃樂團とその附屬生徒合唱團の技術をもつてしては重荷に過ぎるこの大曲を、相當の歲月練習して公表した。この時は何しろ吾が國

に於ける初演のことであり、且又音楽それ自體の持つ異常な優美さも手傳つて、非常な感銘を與へたのだつた。但し技巧上この初演がどの程度に演奏されたのか當時の私には全然判断がつかかなかつたが、今だに多少共記憶に遺つてゐるところは、氏の指揮が相當以上に遅いテンポで、雄大、壯麗な楽曲をエンヤラ〜と終り迄重さうに引張つて行つたと言ふ感じがしたことであつた。それにしても、あの緩徐樂章や、バリトンのソロから分唱に這入る聲樂の劈頭のところなどは天籟的な艶麗さ優麗さを感じさせたものであつた。この音樂會が私に與へた感激は筆紙に盡し難い。

(野村光一「音樂青春物語」昭和二十四年 湖山社 五〇頁〔初版は昭和十七年 音楽之友社〕)

大正十年五月卅一日起案 決定 六月二日決行

紋勳内申案

本校外國人講師グスタフ、クローンハ大正二年一月聲樂管絃樂和聲論等ノ教師トシテ傭入レタ以來今日マデ八年半ノ間熱心ニ授業ヲ行ヒ其成績甚タ良好デ又本邦音樂ノ普及向上ニ盡シタ功績ガ顯著デアリマスカラ勳五等ニ紋シ旭日章ヲ授與セラレマス様上奏相成度此段内申致シマス

年月日

校長

文部大臣宛

(手書き)

(明治33〜昭和21年 叙位叙勳上申原議 人事係)

(五) マルガレーテ・ネトケ＝レーヴェ Margaretete Netke-

Löwe

在職期間 大正十三年〜昭和六年(一九二四〜一九三二)、昭和二十一年〜四十年(一九四六〜一九六五)

外國教師・傭外國人教師
担当科目 唱歌、独唱歌

履歷(要約)

一八八九年六月二十五日ドイツのプレスラウに生まれる。同地王立アウグスタ高等女学校を卒業し、英語教員免許状を取得。フランクフルトでヨハネス・メシヤールト教授、ライムント・フォン・ツル・ミュレンに師事し、ベルリンで独唱歌手となる。第一次大戦時は故郷プレスラウで唱歌教育にあたり、そのかたわら演奏活動を行い、画家マルティン・ネトケと結婚。

一九二四年(大正十三年)東京音楽学校に招かれ来日。東京音楽学校では長年にわたり教授活動を行う。昭和四十年退職の際には「外國人名譽客員教授」の称号を与えられた。昭和八年〜十五年に宮城学院女子専門学校講師、昭和十二年〜十九年には自由学園教師も勤め、日本にドイツ芸術歌曲の歌唱法を伝えた。

一九七一年(昭和四十六年)東京で没する。門下生には伊藤武雄、木下保、佐藤美子、立川清澄、田中信昭、長門美保、四家文子などがある。

樂壇に咲く國際美談

故國を迫はれた恩師へ教へ子が慰安の催し

花形歌手總動員でけふ謝恩音樂會

國境を越え、人種を超えた師弟の恩愛が冬枯れの樂壇に美はしい謝恩の花を咲かせようとしてゐる——佐藤美子、澤智子、關種子、黒澤貞子、齋藤静子、岩谷廣子、徳山穂、藪田誠一等、等、現在我